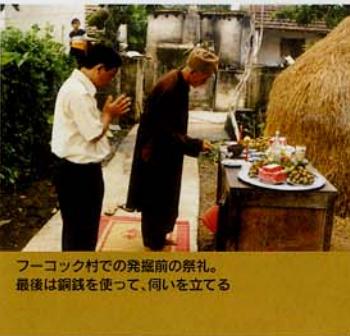


の文化局に出土品の移譲をお願いするま

たちも発掘に参加するよと言つて、炎天下の発掘にボランティアで参加してくれた。そして、去年の年始に発掘調査報告会を役場の前でおこなったが、人口五〇〇人前後の村で聴衆が一〇〇〇人近くも集まつた。みんなキムランの過去に関心があつたのだ。

発掘では、陳朝期(三三一四世紀)を中心高級施釉陶器を生産していたことが明らかとなり、出土したきれいな施釉陶器たちは、過去に自分たちの村も高級な陶磁器を作つていたんだという意識をもたらしたようだ。一方北隣りのバツチヤンの方は文献などから陶磁器生産が古く遡ることは確実ながらも、考古学調査が進展しておらず、キムランのような物証がない。キムランの人の意識にはバツチヤンよりこちらの方が、生産開始が古かったのではないかとか、こちらの方が陶磁器生産の本場だったのではないかという希望的憶測も生まれはじめた。

歴史研究グループの班長を努めるホン氏はさうそく出土した陶磁器類の複製をはじめた。特に美しい青磁の釉薬復元を目指して、試行錯誤を重ねているところだ。そして、役場や住民は、それまでさほど興味を示さなかつた出土陶磁器片に興味をもち、それらをぜひ村で展示したいということになつた。キムランの人は臨時展示室建設のために、お金を寄付し、市



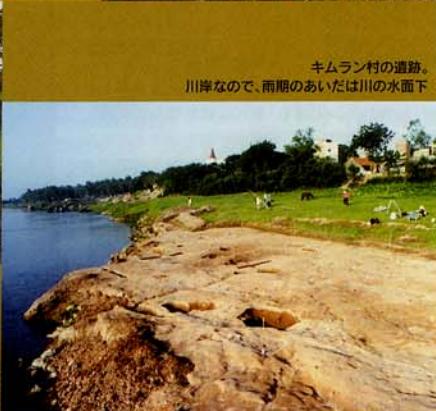
フーコック村での発掘前の祭礼。  
最後は銅鉄を使って、問い合わせる



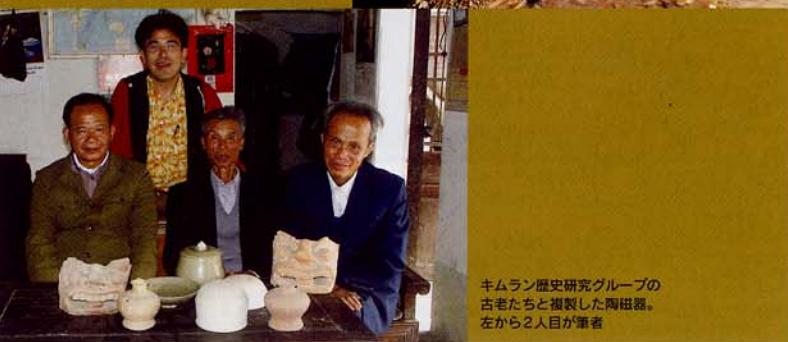
バッコック村での発掘前の祭礼。  
酒、果物などは供物として欠かせない



お寺の奉仕会のおばあさんが  
ボランティアで発掘に参加



キムラン村の遺跡。  
川岸なので、雨期のあいだは川の水面下



キムラン歴史研究グループの  
古老たちと複製した陶磁器。  
左から2人目が筆者

二〇〇一年の夏、北部ベトナムの平野部に位置するバツチヤン省で建設中の国道脇から碑室墓が発見された。碑室墓とは、墓室をレンガで築いた墳墓のことである。碑室墓は中国系の古墓であるがため、緊急発掘されないことが多い。しかし、この場合は違つた。ズオンロイ村のはずれに位置しており、李朝(一一一三世)

### 李朝王妃の祖先墓は何処?

紀初頭(王室の故郷として有名なティンバン村)にも隣接していた。ズオンロイ村は、李朝初代王のお後の故郷という伝承があり、地元の古考を中心に、墓が王妃、あるいはその祖先の墓ではないかといつた。緊急調査をおこなつたハノイの考古学者が、調査初動時に李朝期という憶測の年代をそのまま口にしてしまひ、マスコミの注目するところとなり、保存を希望する地元の意見が公にされた。

## ベトナム人流 遺跡活用法

西村 昌也 (にしむら まさなり)

NPO法人東南アジア埋蔵文化財保護基金代表

### 地面の下とのつながり

北部のナムティン省バツコック村で、村の歴史を探ろうとしていたときのことである。発掘開始に当たつて、地靈や祖先に対してお供えをして、問い合わせてからないと、発掘はできないと土地所有者にしばしば言われてきた。もちろん田んぼや畑にしているところでは、ほとんどそのようなことはないのだが、代々家を建ててきたような敷地の場合、たとえそこに今屋敷がな

### 歴史認識の再生産

調査が進み、碑室墓自体は李朝のものではなく、中国支配下の四~六世紀位のものだと判明したが、先に流れた年代観は修正できないまま一人歩き。結局、地元の保存案を受け入れなければ、国道建設は進められないままで膠着し、最終的には墓を移設し、李朝王室のお後の祖先墓として上屋を建てて保存された。

じつはこの話には裏があつて、碑室墓は裏に隣接して保存された。国道建設側から大きな資金獲得をもくろむ人々がこの保存運動を利用していたようだ。

調査が進み、碑室墓自体は李朝のものではなく、中国支配下の四~六世紀位のものだと判明したが、先に流れた年代観は修正できないまま一人歩き。結局、地元の保存案を受け入れなければ、国道建設は進められないままで膠着し、最終的には墓を移設し、李朝王室のお後の祖先墓として上屋を建てて保存された。

じつはこの話には裏があつて、碑室墓は裏に隣接して保存された。国道建設側から大きな資金獲得をもくろむ人々がこの保存運動を利用して保存されていたようだ。

では話が進み、出土陶磁器の一部は、キムランの管理となつた。これから村の過去の栄光として価値づけられるのだろう。このように、地中からあらわれた遺跡や古物が、住民の郷土への意識に影響す

ることはよくあるようだ。もちろん、人びとの歴史認識は学問的手続きをへず、過去の姿を現在に映して、見栄えの良いところだけから作られている。しかしこれもひとつ歴史である。もともと人間

は歴史認識の再生産を積極的におこなつてきたのだから。面白いのは、彼らの場合、地中の物証を自分たちの現在のために積極的に活用しているところだ。考古学者や文化財保護関係者負けである。

